

# 学 年 通 信 第一号

平成23年6月1日

明秀学園日立高等学校 第3学年



入梅の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。

明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。白梅への道標である校訓を日々実践していますか。「やるからやる気が出る」を実感していますか。そして、挨拶や手伝いを習慣化していますか。

大変遅くなりましたが、3学年第一号は新年度最初の学年集会における訓示の内容です。時間に制約があったので、実際の内容に加筆しています。ただし、「学問のすすめ」の論の一環であることに変わりはありません。この号も目に付くところに貼り付け、何度も熟読することを期待しています。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。

## 4 / 1 3(水) 学年集会訓示

### —この社会はいまだに個人の献身に救われている—

この震災についてはどうしても語らなければいけないことがあります。この日本という国が、まだまだ政府やその他の組織によって成り立っているのではなく、一部の士(学徳のある人)の献身的な行為によって成り立っているということです。消防庁のハイパーレスキュー隊員や自衛隊員、東電の協力会社の社員は、組織の命令で困難な任務に就いたのではなく、自らの意思に従ったことは諸君も知っての通りです。被災地で活躍するボランティアについても言うまでもないこと。政府は組織に要請することができたとしても、何人(なんびと)にも強制することはできません。最後は末端で志願した個人の献身によって、我々の社会は救われてきました。この構図は、以前からもう随分と変わっていないように思います。

被災地から我々の身近に目を転じれば、様相が異なります。節電が呼びかけられている時に、節電をしない者がいたり、被災地の物資が足りないと叫ばれている時に、買占めをしたりする者がいました。しかもその数は決して少なくはありませんでした。では、何故この国は成り立っているのでしょうか。

それは勿論、節電が呼びかけられている時に、節電をしない者がいても、それを補って余りある者が節電を心掛けていて、被災地の物資が足りないと叫ばれている時に、買占めをする者がいても、不安に打ち勝ち、買占めを自重する者が現前として存在したからに他ありません。これは自明のことです。

### —学ぶことを知っている者によってこの社会は成り立っていること—

もっと諸君の身の回りの社会に目を転じてみましょう。老人や妊婦、障害者に席を譲らない者がいても、席を譲る者がいるから、この社会は相互扶助の精神を保ち、成り立つことができます。その行為は座席がシルバーシートであるか否かの判断を必要としません。挨拶をしない者がいても、挨拶をする者がいるから、社会は信頼という礎の上に成り立つことができます。その行為は、相手が知り合いであるか否か、目上であるか否かの判断を必要としません。ゴミを落とす者がいても、ゴミを拾う者がいるから、この社会は秩序が保たれ、成り立つことができます。その行為に誰が落としたものか、我家の敷地内であるか否かの判断は必要としません。

学校という社会に目を転じれば、清掃をしない者がいても、清掃をする者がいるから、学校は学校たる環境に保たれ、成り立っています。そこが自分の使用する場所か否かの判断は必要ありません。授業を受け身で受ける者がいても、能動的に受ける者がいるから授業は授業たる環境に保たれ、成り立っています。その科目が自分に必要か否かの

判断は必要ありません(これについては以前にも言いました)。

畢竟(ひっきょう)すれば、己(おのれ)が未熟者であることを知らない者がいても、己が未熟者であることを知っている者によって社会は成り立っています。即ち、己が無知であることを知らない者がいても、己が無知であることを知っている(「無知の知」)者によって社会は成り立っているのです。

換言すれば、学ぶことを知らない者がいたとしても、学ぶことを知っている者によってこの社会は成り立ってきたとすることができます。このことを諸君は決して忘れてはなりません。この「学び」への門戸は、これまで常に開かれていたわけではなく、また健全な状態を保ってきたわけでもありませんでしたが、学ぶ者が虐げられるような不幸な時代において、**つまりばかな人々が勇ましかったり、かしい人々が臆病だったりした時**(「飛ぶ教室」)は、時に地下深く、時に異国に亡命し、その時々々の権力者の手を逃れて失われることはありませんでした。そして、今後も決して失われることはないでしょう。それこそが人たる所以(ゆえん)であろうと思います。

### —乗り物が速くなるにつれ、人の心は疎遠になっていったということ—

今回の震災で諸君は様々なことを考えたことでしょう。中には今すぐにも被災地へ赴き、被災者の力になりたいと考えた者も少なくなかったと思います。しかし我々は、ここに留まるより他はありません。それはまだ諸君が、情報を収集し分析する力を、自らの意思を伝達する力を、他人の思いを汲み取る力を、そして、それを第三者に伝達する力を、まだ十分に身に付けていないからです。表現や術そのものを学ぶ力からしてまだ十分に有しているとは言えません。諸君、今はひたすら学び、力を蓄える時です。そして時が来たら、その力を遺憾なく発揮することです。大切なことは、今の気持ちを保ち続けること。今の気持ちをこれから後も忘れないことです。

こんなにも身近で惨事を経験した我々は、これまでというもの、真摯に命の尊さや人と人との結びつきの大切さに目を向けることが無かったことを思い知りました。他者への思いやりを素直に表現することができなかったということも思い知りました。私たちは近代化によって快適な暮らしを手に入れてきましたが、それと同時に、我々はこれまであまりにも人間関係を疎にしてきました。これは、近代化が成し遂げたもう一つの産物と言えるでしょう。近代化は、多くの犠牲を払って成し遂げられてきたことを、「乗り物が速くなるにつれ、人の心が疎遠になっていった」ことを、我々は顧みなければなりません。

### —近代化とは—

近代化は、人と人の精神的なつながりを疎(おろそ)かにし、経済発展を、つまり富めることを、生活水準を上げることを選択してきました。その効率と生産性を上げるために人々は農村を捨て、都市に集まり、中産階級と労働階級という新しい階級を築き、**少数の知的エリートを頂点にピラミッド型の労働市場を形成しました。このピラミッド型の労働市場は、ピラミッド型の学歴社会の構造とよくマッチし、利己的な個人競争を生み出します。**(『「学び」から逃走する子供たち』佐藤学)これが「教育の近代化」の始まりです。

産業の近代化は例えば土呂久、水俣を初めとする様々な公害を発生させ、多くの被害者を生み出しましたが、それらは近代化に警鐘を鳴らすことはあっても、近代化を減速させることはありませんでした。時は正に高度経済成長期、犠牲を強いてでも近代化という国策を推し進めなければならなかったからです。国は責任をなかなか認めません(いざ認めても、救済認定の基準に非常に難しい要件を含んでいたりします)。その傾向は現代になり労働者から企業へとベクトルが引き上げられたものの一層顕著になりました。いわゆる新自由主義(ネオリベリズム)の到来です。かつてはレーガノミクスと呼ばれていた規制緩和による経済のグローバリズム(自由主義)です。これにより、経済(労働市場)は対外開放され、単純労働市場が発展途上国に移転し、若年労働市場(中高生の求人)が崩壊したばかりか、派遣社員の枠組みに規制緩和が及び、正社員の割合が大幅に低減しました。この新しい資本主義の潮流にもてはやされた言葉が『自己責任』です。国はこの政策を推し進めますが、自由競争に敗れた企業の多くは企業努力の欠如ということで片づけられ、破綻するかまたは人員を整理して、多くの失業者を生み出しました。破綻は『自己責任』で片付けられる。それがこここのところの近代化=新自由主義が造りだした社会であり、今の日本は産業を停滞させることが禁忌だった時代から競争を停滞させることが禁忌な時代へほぼ移行を遂げたところです。いずれにしろ、国益中心の国家主義が、地球規模の問題をいくつも引き起こしています。

### —教育の公共性—

### ―どちらに側に身を置くか―

我々は、これまで人と人の繋がりを断った報いを受け入れていく他ありませんでした。そしてここに来て、「そこまでして手に入れてきたものが、自然の前には何の力も発揮しえず、何の価値も持たなかった」ということを思い知りました。我々はこの一世紀余りの間見失ってきたものが何だったのか、大変な代償を支払うことで確認することになりました。それに気が付かない人が、まだ沢山いることも事実です。しかし、「学びから逃走する」諸君がこの震災を通して肌で感じ取ったことを表現すれば、このようなことに違いないだろうと被災地の高校生の態度や、学校に戻ってきた諸君の顔つきを見て感じていました。

ただ、気を付けなければならないことがあります。我々日本人は、即時的同一化(原則論を熟慮することなく、時代の空気でいかようにも変容し、一気に合意を形成すること。追いつめられたとき、粘り強く思索することを見失って、瞬時に合意が形成されること)と言われる欠点を持っています。これによる一過性の感情、もしくは感傷によって日本は幾度となく存亡の危機にさらされて来ました。

16年前に起きた兵庫県南部地震(阪神淡路大震災)によって、今も仮設住宅で暮らす被災者に、孤独死を遂げる人がいることを知っているでしょうか。新自由主義は「自己責任」の他にもう一つの標語を作り上げました。「自助努力」です。被災後、「自助努力」が足らないと支援を打ち切られた人々も少なくありません。16年前、あの時も「がんばろう神戸」が大合唱されていました。

この震災が10年後に語られるとき、我々は協同社会を実現し、被災地の復興を、親を失った子供や子を失った親を初め、すべての被災者に分け隔てなく支援を続けているでしょうか。それとも、「もう10年も経つのか」と特集の記事や番組に「あの時が社会を変えるチャンスだったのに」とまるで他人事のように口にするのでしょうか。

震災から10週間以上が過ぎ去りました。新聞には今も亡くなった方々の名前が年齢とともに掲載されています。まだ年端もいかない小さな子が犠牲になっているのを目にするにつけ、胸が痛んでなりません。我々の今後の行動のひとつひとつは、犠牲者の死や悲嘆を無駄にするか否かに直結していると言えます。犠牲者とはもちろん、この震災による犠牲者に限るものではありません。近代化により生み出されたすべての犠牲者を指しています。

大切なことは、諸君がどちら側に立つかということです。自分が未熟であることを自覚し、学ぶ姿勢を失わないよう努力するのか、自分が未熟であるということ、無知であるということを知らないままで過ごすのか。粘り強く思索することなく大衆迎合するか否かです。そのどちら側に身を置くのかを常に意識に上らせておくことです。

人は差別心を持っていることを知らない者たちが他人を差別することがあっても、人は差別心を持っていることを痛感している者たちがいるからこそ社会は成り立っています。自分さえとか自分くらいはと思うか、それにより被害を被る人がいることを想像できるか否かということでもあります。諸君はそのどちら側に立つかということです。

つまり、『学ぶ者』になるか否かということです。

### ―来るべき社会―

学ぶことを知っている者が、人の痛みを知る者が大多数に上る社会であるならば、この世の中はどんな世界になるでしょう。それが、諸君が目指す世界、『協同社会』です。諸君の力でこの世の中を変えるためには、自らの意思による「学び」が行われなければなりません。我々は、我々自身の手「学び」を取り戻し、真の自由と平等を手にする機会に、この国の近代化以降の歴史において初めて直面しています。ポストモダン<sup>※</sup>=協同社会の到来です。

自らの意思で学ばなければなりません。そうでなければ個々人が自立し、援助、協力し合う協同社会は実現できません。今はよく学び、力を蓄えなさい。来るべき時に備えなければなりません。

※ポストモダン：ここでは脱近代主義とか、近代主義を否定する立場全般を意味しています。

## 3学年の目標

- 「努力せよ」　進路実現は、努力なしには得られないことを身をもって諸子に示せ。
- 「学べ」　　　　自分は未熟であることを自覚し、学ぶ姿勢を保ち続けよ。勿論、この目標については、3学次の目標だけに留められません。一生学んでください。我々は、無知で蒙昧です。ただし、それを知っているからこそ、我々は、未来を切り開くに足る教養と知恵を身に付けた同志となり得ます。

「教育の近代化」は、教育の公共性を未成熟のままにしました。我が国において教育の目的は、国家の繁栄にあり、同時に競争による個人の社会移動(親世代よりも高い教育経験を獲得し、親よりも高い社会的地位へと移動すること)に求められてきました。国益中心の国家主義と利己的な個人競争が「教育の近代化」の両輪でした。この構造の中で、教育の公共性が脱落してしまいました。なぜなら、公共圏は本来、国家と個人の中間地帯である社会、中でも自立した個々人が援助し合い協力し合う協同社会を基盤として成立するものだからです。

教育の目的が国家と個人の両極に引き裂かれた日本においては、協同社会は成熟せず、教育に対する公共的な意識も成熟を阻まれてきました。(前掲 佐藤学)

こうして競争主義、出世主義、権威主義が跳梁跋扈して半世紀、諸君が「学びからの逃走(佐藤)」を起こし、学びに対してニヒリズム(虚無主義)やシニシズム(冷笑主義)を引き起こすのは至極当然の結果と言えるでしょう。「学び」を産業主義の構造維持のための装置にしてしまったのだから致し方ありません。

近代化＝産業主義および「教育の近代化」が造りだしたピラミッド構造は、社会組織が複雑化した分、複線的に増殖し、いたる所に蔓延(はびこ)りました。とはいえ、日本におけるピラミッド構造はもはや体をなしていません。形骸です。その頂点に立つ者の多くも、決して知的エリートなどではなく、職場での地位や社会的階層にしがみついている愚かで矮小(わいしょう)な人たちであることを「学びから逃走」する諸君はもうとっくに見抜いているはずです。近代化によって築かれた構造が土台から崩れようとしている時に、折悪しく震災によって職場での地位や社会的階層が何の意味もなさないことを白日の下にさらされた為政者たちは、自己の地位や権力を失うことを恐れ、時代の要請に逆行するかのように繰り返し権力を振りかざしているように見えてなりません。

**産業主義の社会ではモノの生産と消費が経済の中心を占めていましたが、ポスト産業主義の社会では情報や知識の交換と対人サービスの提供が経済活動の中心を占めるようになります。**(佐藤)つまり、これまでの生産と消費の社会から、これからは創意と工夫、そして多様な人たちと共生する社会へ、人本来の理性に基づく社会に立ち返ろうと変化していきます。これからは、自立した個々人が援助し合い協力し合う協同社会がつくられていきます。勿論、教育の現場こそ、いち早く公共性を取り戻し協同社会を実現しなければならない場所となります。

今回のような大震災に見舞われ、一人の生身の人間となったとき、職場での地位や社会的階層が何の意味もなさないことを我々は確認しました。これまでの産業主義は、もしかすると人類の成長過程としては欠かせないものだったのかも知れません。しかし、成熟した人類が創り出す協同社会は、少なくとも他者の犠牲を払ってまでも国益を追求するものではありません。

### ―価値観が変わるということ―

震災を経験し原発事故を抱え、大きくこの国が変わろうとしています。それを実現するのはきっと「学びから逃走」してきた諸君です。自立した個々人が援助し合い協力し合う協同社会には、近代化が産み出した地位や名誉という価値観は、既に諸君には意味をなさなくなったように、今後この国において何の意味も持たなくなります。大きく国が変わるということは、そこに住む国民の価値観が大きく変わることを意味します。私が想像するには、これからの価値観は『人にどれだけ必要とされるか、人からどれだけ信頼されるか』にあるように思います。

人の死はそれが津波によるものであっても交通事故によるものであっても同じです。遺族は嘆き悲しみ、同じ思いを抱えます。深い喪失感です。今、全く新しいグランドデザイン(全体構想)による復興計画を進めるべきとの論調が主流となっています。勿論、そのこと自体に異論はありませんが、歩道を歩く子供の交通事故死にさえ、今我々が正にそうであるように、人の死を我が身内のこととして悼む気持ちを有していれば、一人の子供の死をきっかけに、疾(と)うに歩道と車道は隔絶され、少なくとも歩道を歩く子供に交通事故死は絶えて久しかったはずです。いや、道の主客が転倒する前に、決して想像に難くない事故を未然に防ぐべく、多くの士が立ち上がり、創りあげたグランドデザインによる道は、今の道の有り様とは大きく変わっていたはずでした。近代化は、このようにして人の死の意味を顧みることなく、国益の名の下に数えきれない犠牲者を生み、他者の嘆き苦しみを見過ごしにしてきたのです。今も土呂久や水俣など、公害病に苦しむ被害者がいます。そして長崎や広島にも、補償を十分に受けられずに苦しんでいる原爆症の方々があります。戦争、地震、津波、水害、交通事故、薬物、原子力、こうしたもので被害を被った人たちは、すべて近代化の犠牲者です。そうした犠牲者の上に成り立つ社会や価値観に一体何の意味があるでしょうか。